

大学教育と学生指導

都 留 春 夫

昨年新聞に学生部教授制の試案についての報道がのり波紋を起した。最近実業界に大学では社会に出てから十分に指導力を発揮できるような気骨のある人物をつくり出すことに成功していないという声もあがっている。教育学会では最近になって大学教育の本質や大学管理の問題を重要な研究課題の一つとして取上げている。

急変する現今の社会状況において、学校がどのように青少年を教育し、どのような人物を社会に送り出したらよいかということは、教育界の重大関心事でなければならないにもかかわらず、わが国の教育学の領域においては、小学校・中学校・高等学校までの教育についての研究は進んでいるが、大学教育についての研究が非常におくれているのが現状である。

大学教育の目的・使命は研究・教育・人格形成の三つであるといわれている。このうち第3の目的・使命の達成に深い関連のあるものとして、課外活動の指導育成ということが次第に重要視されるようになってきた。

継続する政治的不安のもとにおかれている学生達とはかく現実をはなれた理想主義的理念と青年特有の正義感にかられて、急進的に走りやすく、しばしばはげしい政治活動をくりかえし、時には大学が長年にわたってきずきあげた学問の自由と、大学の自治をあやうくすることもあった。このため学生活動を健全に育てることも大学にとって重要な問題となっている。

また、戦後急激に数を増した学生達の中には、経済的に困窮しているものも多く、これらに対する厚生福祉の強化も欠くことのできないものとなった。更に試験地獄その他の社会不安にくるしみ、個人的な問題になやむ学生の指導、神経症や自殺の増加に対する対策等も無視できない。

このように考えてくれば教場外における学生の指導ということは、教育活動の重

要な一環として大学の組織の中に位置づけられなければならないということは疑うべきもないことであろう。

従来大学という組織体のなかで学生指導がいかなる機構のもとで運営されているかを調べてみると、次の二つのタイプに大別することができる。

と思う。

I. Decentralized Program

これは英国のケンブリッジ、オクスフォード等の大学でふるくから見られる型で、米国ではハーバード、コロンビア、エール、プリンストン、アモースト等の由緒ある大学にみられる。これらの大学は比較的小さい教養学部（リベラル・アーツ・カレッジ）あるいは高い学問水準をほこる大きな大学院をもっている。

エール大学の例では、学生指導のプログラムは寄宿舎を中心としておこなわれ、すべて教授の責任と考えられている。学生指導にあたる教授は自発的に学寮における学生との接触・相談・社交的なプログラムに積極的な参画をする。したがって学生指導の職務の専門化ということはあまりおこなわれず、カウンセリングやクラブ活動の指導も特殊なものを除いて、他はすべて教授の仕事と考えられている。学生指導のための予算も学部の予算の他に特別にくまれていない。

コロンビア大学の教養学部（コロンビア・カレッジ）では、**Dean of Students**があり、その下に数名の秘書がいる以外には、いわゆる学生部のような部局はなく学生に対する諸種の援助、指導、助言は、主として指導教官によっておこなわれる。指導教官は専任の教官のうちから選出され、ひとりにつき35人位のアドバイザーをもっている。ここでは訪問者が、学生部の仕事について質問しても、その質問の意味がわからないという答をうるのみである。

これらの大学においては、日本の大学の学生部のおこなっているような業務はあちらこちらの部局に分散して所属し、それらの部局の重要なポストには教授が任命されている場合が多い。

II. Centralized Program

第IIの型はウィリアムソンのいるミネソタ大学や、ロイドのいるブリガム・ヤング大学等、アメリカ中西部にある比較的新しい大学にみられるもので、学長の下に中央に強大な学生部がおかれ、その中も高度に組織化されている。副学長または学生部長の管轄下にいわゆる厚生補導業務を、大幅に統合し、学生に対するサービ

スとしての機能を発揮している。この型の大学では、これらの業務のために特別に予算を計上しており、また一つ一つの業務が専門化されている。しかしながらこのようなタイプの場合でも、アメリカの大学では、主要なポストにつく者には教授の資格をあたえられており、また実際に講義をもっている場合が多いようである。

戦後わが国に紹介されたのは上記のうち第Ⅱの型に属するもので、現在の傾向は、アカデミックなことに関するもの以外、教授は学生指導ということにタッチせず、何かあれば学生部職員の仕事と考えられるようになってきているところもある。米国で出版されている **Student Personal Work** に関する本も大部分は州立大学の学生部に関係したひとびとが、第Ⅱの型の運営機構について記しているものである。

実際に起る学生の問題もなかなか複雑で、時間と精力と関心を学術の研究に集中しようと考えている教授達の手にはおえない場合がしばしばであろう。そこで、学生の世話をする責任者を別につくり、その方の専門家を少しでも多くおいて、学生があまり問題を起さないでもすむようにしようという考えが起ってくる。

この考えではややもすると学生指導は、学生が落ち着いて勉強できる状態にするのがつとめで、大学の第一義的使命である学問研究に対してのサービス機関であるとされる。学生部の職員は火事が起った時に火消し役をする消防夫のようなものか、あるいは一歩すすんでも、こわれかかった家をなおして何とか人のすめる所にする修理役に止ってしまい、実際に人間をつくるというところまではいかない。

この人間をつくるということが、いまの教育では一つの大きな穴になっているようである。旧制度においても、人間をつくるということは、大学教育の目的として法律に規定されてはいたものの、実際には、そのことが大学の主要な任務の一つとは考えられていなかったと思う。これは、人間づくりということは中学校と大学学部との中間にある予科とか高等学校において十二分になされてくるものと考えられていたからではなかろうか。

現在の学生は旧制の時代より2年位若くて大学に入り、しかも、ますます激しい入学試験を通過しなければならないため、入学前の1,2年は片輪のように頭ばかりをつかう生活をしてくる。若くて頭でっかちになりやすい青年達に対する教育的配慮の必要性は、旧制の大学よりはるかに重視されねばならぬものであろう。

このような状態のもとにある大学生の指導計画を運営する機構をどのようにしたらよいかということは、研究の余地が多い。現状では学生部の強化、担当職員の再教育、業務の専門化、カウンセリング等の科学的技術の導入等が目下の急務といわれているが、この傾向によってとかく学生部の活動の再編成のみに焦点があわされそうになることには注意しなければならないと思う。

わが国の大学教育の伝統の中で、学生指導ということがどのような立場でおこなわれてきているかということを検討して、そのうえにたって今後の根本的な方針をたてることも必要であると思う。

明治初年以來発展の歴史をたどってきた大学教育の中で、学生指導は主として次のようないくつかの立場からおこなわれてきたと思われる。

1. 教育的立場からの学生指導

もっともふるくからあったと思われる立場は、教育的見地からおこなわれる学生指導であろう。学生の人間的な成長を、あらゆる面において指導・育成するのは、先達としての教師の役目であった。教師は人格者であり、師弟の間には密接な人格関係に根ざした主従関係がある。

この師弟関係は封建時代の徒弟制度とも通じるもので、きびしく鍛えることと、ころばぬ先の杖をあたえる温情との両面がある。恩師の意に従わぬ行動があれば破門の状態に追いやられる覚悟も必要である。

教師の多くは弟子の一人一人の人格的成長に深い関心を示し、側近の気持を理解し卒業後も生涯にわたって何かと個人的な面倒をみる習慣がある。

激増する学生数のために、このような密接な人間関係を教師との間にもつことのできる学生は、ごく一部になってしまったが、現在でも、学生が強く人格的影響をうけているのはこのような接触のできる教師からである。

2. 訓育的立場からの学生指導

学生の行動を一定の枠内にはめこまねばならぬという立場から、おこなわれた生学指導の伝統もかなりふるい。ふるくは主として監視という語が用いられ、後には監督という語がつかわれていた。学生の行動が一定の基準通りにおこなわれるようにたえず見張っていることが主眼であったようで、その反面実際行動にあらわれない限り何を考えていてもあまり問題にはならなかったようである。

明治後年から大正に入るに従って処罰ということが多くなってきたようで、取締

りの強化が重要視されてきたと思われる。

更に行動のみでなく、思想の取締りということも強化されはじめ、それが思想善導という形で、国家主義・軍国主義的な思想の注入をもって学生指導の主眼点とされるような時代も経てきた。

戦後は一時この立場は弱くなったが、再び学生の政治活動が隆盛するにおよび、次第に処罰ということが学生補導の主要な問題として脚光をあびてきた。

現在でも学生部の活動といえば権威主義的な警察力による補導と見る誤解をまねくもとなっている。

この立場は社会の秩序、特に学園の秩序を保つためにやむを得ないものと考えられ、更に積極的に、あやまちを犯したものには、はっきり間違いを間違いとして指摘し、ルールを破った場合にはきびしく処罰をすることが、優秀で純粋な学生であればある程、本人のために必要なことであるという見方から、肯定されている。

3. サービスの立場からの学生指導

以前もあったが戦後特に顕著になったのは厚生面の援助である。この立場からのサービスの進歩は日本の大学において最もよくおこなわれている面の一つであることはミネソタ大学から来朝したウリアムソンが指摘しているところである。経済的困窮を克服して勉学をつづけようとする学生に対して、福利厚生をはかろうとして奨学金をあたえ、内職を紹介し、最低生活を保証し、物資を廉価で提供しようとする活動がおこなわれ、また個人的な相談に応じる態勢をととのえようとしているが、正課教育の補助手段と考えられ、教育的配慮はむしろ間接的になりがちである。

4. カウンセリングの立場からの学生指導

1950年以後にアメリカから紹介されたのは、心理学的カウンセリングの理念をもって、指導の基礎とする考え方である。軍国主義と教育勅語を廃棄した戦後の教育界は人格指導の理念を見失い、これにかわって、心理学的立場から、科学的に、個人的人格と欲求を理解し、全人的な成熟をはかることに主眼点をおくようになった。この傾向は、テスト、カウンセリング、グループ・ダイナミックス等の科学的方法の導入をうながし、SPSという新語をうみ、学生指導業務の専門化をはかる方向に一步前進させた。

この方面の研究も進み、諸種の講習会、研修会が開かれるにおよび、学生部職員

の自覚をうながし、責任感を高め、広い意味での教育者であろうとする意欲を起させた。しかし一方においては、学生の問題は専門家のいる学生部にまかせようとする空気が教授の中にあられたり、また反対に、学生部の出すぎた振舞を心よしとしない教授もあるといわれている。

学生指導の基礎となる立場は以上の四つの他にもあるかもしれないが、いずれにせよ、これらの立場はどれも無視できないものであり、それぞれの利点をのばし総合して、将来の方針をたてるべきであると思う。

学生生活の指導は、どの大学においても、学生総数の100分の1にも足りない学生部職員のみで遂行できるものではなく、日常教室や研究室において接触のある教授と学生の交流を中心として、学生部職員やその他の一般職員が資料を提供し、専門的立場から協力し、業務運営の連絡調整をはかりながら、全学的なプランを展開していかなばならないと思う。学生指導の理念、管理運営、専門技術の向上についての研究は、将来教育学の分野における一つの領域として教育学部の講座の内に組入れられるものであると考えている。(1960. 11. 28) (本学助教授, 学生部長)

University Education and Student Affairs Work

(English Résumé)

Haruo Tsuru

It has recently become one of our major interests to study purpose, systems and programs of higher education although those of primary and secondary education have been important research subjects in the field of educational studies for many years. How to improve the effectiveness of student affairs work seems to have become an significant part of future development of university education in this country.

I. Two major types of student affairs programs

(1) Decentralized programs

The characteristics of this type are :

- (a) Faculty members are chiefly responsible for all phases of student affairs work
- (b) Little effort has been seen for the professionalization of the work
- (c) No special budget is set for the work outside of the general budget for academic training

(2) Centralized program

The following are the main characteristics of this type :

- (a) Responsibilities are centralized in the special office which is called student personnel office.
- (b) Number of professional workers are employed in the central office.
- (c) Special budget is set for the work outside the regular educational budget.

II. Four basic trends in historical development of student affairs work in Japanese Universities.

(1) The educational approach

Professors are considered chiefly responsible for helping students in every respect. Close contact between students and faculty, which is characterized as apprenticeship, is evident. However, it has become difficult to keep this approach effective since student enrollment rapidly increased.

(2) The disciplinary approach

In this approach, it has been thought that student conduct should be strictly controlled, so that they are kept from acting conspicuously different from the standard set by society and the university. Student affairs workers has been considered mere disciplinarians and campus police.

(3) The service approach

A series of welfare services for needy students have become of special importance since the World War II. This approach concerns mainly how to improve students living conditions so that they can continue their academic work successfully.

(4) The counseling approach

A fourth and the newest trend is to see student affairs work as various forms of counseling. It has been recognized that old concepts of guidance and welfare work are completely lacking psychological basis of individual personality and his basic needs. Emphasis on scientific studies of human behavior has called for the development of counseling, measurement and group dynamics in student affairs programs.